

も茨城の海洋生物研究の歴史が解説されている。このような埋もれやすい地域生物研究の成果をきっちり書きとめるのは地域研究者にしかできない技である。(田中次郎)

□大野正男：「牧野植物図鑑」をめぐる一  
村越三千男・名和 靖との関係― 日本古書  
通信 (949): 36-37; (950): 22-23. 2008.

大野氏は博物学関係の雑誌、文献のコレクターとして著名であり、定期刊行物のバックナンバーを完璧に揃えていることで知られている。はじめは協力関係にあった牧野富太郎と村越三千男が次第に離反し、ついに牧野植物図鑑に「警告」が書かれた経緯は、これまでも何人かによって論じられてきた。著者はそれを踏まえた上、それまでは「図譜」という文字が用いられてきたのに「図鑑」と名付けられた理由、さらに個人名を冠しないのが普通だったのに「牧野植物図鑑」と冠図鑑になったわけを、豊富な資料から推定している。「～図鑑」という書名をわれわれは何の気なしに受け入れているが、意外なことに「植物図鑑」という呼び方は、かつては村越系のものに限って使われており、それ以外は出版社に関係なく「～図譜」を用いるのが普通であったようだ。「植物図鑑」という名称があちこちの出版社で使われるようになったのは、戦後になってからだという。

牧野のはじめ村越と共に植物図鑑出版にかかわった関係で、離反後も北隆館から植物図鑑を刊行することになった。このとき村越の植物図鑑と区別する必要から、「牧野」を冠した書名にしたと考察する。しかし牧野はその理由を序文で説明していない。これについては、牧野と同じ時期に東大動物学教室での研修を経て、岐阜で教職の後に独立して名和昆虫研究所を設立した、名和 靖の行動を牧野が意識していたと考察している。牧野図鑑に先行した名和日本昆虫図説には「名和」を冠した理由が「他日天下に続出すべき他の昆虫図説と区別せんが為」と説明されているが、「牧野」を冠した理由がこれと同じだったことが、牧野の筆を走らせなかったのだろうと推察している。(金井弘夫)

□深泥池七人委員会編集部会 (編著)：深泥池の自然と暮らし. B5版. 247 pp. 2008. ¥3,150. サンライズ出版. ISBN: 978-4-88325-357-9.

京都の深泥池ほど古代から利用され、かつ近代の自然保護意識の発展と共に、繰り返した調査研究の対象になった池はあるまい。巻末の12頁にわたる深泥池年表から、それをうかがうことができる。

第1章：深泥池とは、第2章：深泥池生物群集の成り立ち、第3章：深泥池の文化と歴史、第4章：深泥池生態系管理への取り組み、第5章：深泥池の将来展望の5章より成る。最近の調査を過去の結果と比較して変遷を明らかにし、それを将来の予測と対策につなげる意図が見て取れる。一方第3章では、人文的な分野にも目配りして、自然史ばかりの問題ではないことをアピールしている。各章の先頭頁には「この章のめざすところ」という見出しの、要約というかスローガンが示されており、多数のカラー写真や図を用いて、一般の人にも実情や問題点を分かりやすく説明しようとしている。

深泥池は周辺に石器時代、縄文時代、古墳時代、歴史時代の遺跡や窯跡が密集し、人口の多い京都盆地の農産物、建築材、燃料の供給地でもある上、鞍馬や貴船への通過地点でもあるという立地の故に、常に人との交渉を持ちながら存在し続けてきた。ところが池自体は、溜池として造られたものの、灌漑用としてはさして重要な役割を果たしてはなかったように見える。それにもかかわらず、埋め立てられもせず高層湿原や浮島が温存され、近代の目から見ると貴重な生き物の生息地であり続けることができたのは、地域の識者が事あるごとに手綱を締める行動をとった結果である。尾瀬ヶ原や釧路湿原とは異なり、文化の密接な干渉を受けながら今日に至った生態系として、他のいわゆる自然生態系の行方を予測する上で、たいへん貴重なキーを内蔵している。一読をお勧めする。(金井弘夫)

□今枝由郎：ブータンに魅せられて。岩波新書112. 191 pp. 2008. ¥740. 岩波書店. ISBN: 978-4-00-431120-1.

著者はフランスへ帰化したチベット仏教史